

Title	バルザック『禁治産』をめぐって
Sub Title	Quelques remarques sur L'Interdiction de Balzac
Author	西尾, 修(Nishio, Osamu)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1999
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.77, (1999. 12) ,p.304(181)- 317(168)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	井口樹生, 高山鉄男両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00770001-0317

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

バルザック『禁治産』をめぐって

西尾 修

バルザックはある時期、新しい物語、秘められた事件へと読者を誘う役割を、自ら創造した作中人物ピアンションに託したかに思われる。『ゴリオ爺さん』に初めて姿を現し、それに続く『無神論者のミサ』『禁治産』の中で再登場するこの医学生は、それぞれにゴリオの悲劇的最期を看取り、外科医デブランの死に立ち会い、判事ポピノーの蹉跌に関わるのである⁽¹⁾。そしてとりわけ、1836年の初頭から「クロニク・ド・パリ」に相継いで連載された上記二つの短編の冒頭は、この人物に関する叙述によって幕が開けられ、その師弟関係、友人関係を通して、それぞれに他の作中人物が紹介されて行く、という構成から成り立っている。つまり、ピアンションはそこで、あたかも物語への水先案内人のごとき役割を演じているのである。しかしながらまた、この作中人物は書簡体小説の「私」のごとき役割、自ら固有の物語を語る一人称小説の「私」のごとき役割をも演じているのではないか。少なくともここでのピアンションの役割は、他の多くの作品にみられるような副次的なもの、あるいは評論家的なものに留まっていはいないからである。二つの短編の主旋律はそれぞれの題名の示すままのものであるが、一方ではまたそれぞれに、ピアンションの具体的な生活、人生が語られているからである。これはどういうことなのか。二つの短編小説の物語構造の成立に、この作中人物の造形がどのような意味で関わっているのか。以上の疑問に焦点を当てながら、本論では、『ゴリオ爺さん』を含めた上記の三つの作品のある側面、ピアンションに関わるそれぞれの側面をたどりながら、バルザックの世界におけるこの作中人物の

役割と意味の一端なりを探っていきたいと思う。あれほどに多数の作品に姿を現しながら、結局は自らが主役を張る舞台に恵まれることのなかったこの人物について、わずかなりとも説明できるのではないかと考えられるからである。

1. 『無神論者のミサ』

1836年1月3日の「クロニク・ド・パリ」に発表された『無神論者のミサ』の主役は紛れもなくデプランであり、この作中人物をめぐる二つの主題から作品は構成されている。第一の主題とは、高名な外科医デプランと貧しい水売り人ブルジャの秘められた交流の物語であり、具体的には、将来への夢だけを糧に貧困と孤独の青年時代を駆け抜けたデプランと、そのかれを無償の真心で物心両面にわたって支え続けた一介の水売り人ブルジャの物語、さらには「第二の父」として敬愛したブルジャの死後、その哀悼のために人知れずミサに通うという無神論者デプランの奇跡的ともいえる友情の物語である。そして第二の主題とは、それぞれに独自の修業時代を通り抜けてついには大成する二人の医師、デプランとピアンションの師弟愛の物語であり、これはバルザック世界の天才の多くが試練として経験する貧困とその後に訪れる栄光の物語ともいえる。そして、それぞれにくっきりとした輪郭を持つこの二つの主題は、どのような形で組み合わせられているのかといえば、最初に第二の主題が現れ、これが全編の基調として語られて行くなかで、作品の後半に至ってクライマックスとしての第一の主題が現れ、最後に再び第二の主題に戻ったところで締めくくられている。冒頭から末尾にいたる筋立ての流れの中ではそうなっている。では、バルザックの構想の中にあって、どちらの主題が先に生まれ出したものなのか。第一主題としての秘められた挿話が先にあって、その挿話を核とする肉付けのために第二主題としての師弟愛の物語が造形されたものなのか。あるいは逆に二人の医師の話が先にあって、そこに興味深い挿話が投げ入れられたものなのか。

『無神論者のミサ』という題名に着目すれば、秘められた挿話が先行し

ていたと考えるのが自然である。なぜなら、無神論者デプランが何故ミサに行くのかという題名そのものが問いかけている謎が、この挿話を通して、つまり師デプランが弟子ピアンションに対して語る若き日の回想を通して、初めて明らかにされるからである。また一方、この短編を始めから順に当たり前の態度で読んで行けば、師弟愛の物語が先行していたとの印象も否定できない。というのも、話の前半部分のほとんどがデプランとピアンションの描写に終始しているからである。そしてさらに、冒頭部分に着目すれば、そうした印象はいっそう強まる。

実際、この作品の冒頭は、「医師」あるいは「ピアンション博士」を紹介する一文から始まっている⁽²⁾。先ず「医師」（草稿の段階での出だしの言葉はより直接的に「ピアンション博士」となっている⁽³⁾）について書き始められ、次いでその「医師」を同格補語とする、主節の主語「ピアンション博士」についての記述で締めくくられているが、そこにはピアンションを形象する二つの側面、その理論と実践あるいは現在と過去が順序よく簡潔に述べられている。文章の前半部分において、この「医師」は若いながらに名だたる「パリ学派」の一翼を担い「生理学」に関する素晴らしい理論を打ち立てた医学者であるという第一の側面が紹介され、後半部分において、その同じ「ピアンション博士」が実は若い頃から「外科」の分野に研鑽を積んで来た外科医でもあるという第二の側面が語られているからである。そして続く文章の中で、その師匠こそデプランその人であることが明らかにされ、かくして読者はあの盛名高い外科医デプランの人物像を目の当たりにし、次いでデプランとピアンションの師弟愛の物語へと一気に誘われて行くことになる。とすれば、ここでの作中人物としてのピアンションは、少なくとも読者をデプランの世界へと伴って行くという意味において、物語の水先案内人にも似た役割を果たしているのではないか。さらには、デプランとプールジャの秘められた物語へと読者を案内するという意味においても、同じ役割を果たしているのではないか。なぜなら、その秘密の存在に気づき、ついにはデプランに秘められた回想を語らせる糸口を与えたのは誰かといえば、それもまたピアンションだからなのであ

る。デプランとピアンションの関係があってはじめて、秘められた友情物語が明らかにされるのである。そしてこの秘められた物語は、二人の医師の関係が作品全体を支える骨組みとして設定されたときはじめて、その関係そのものの中に包含され、筋立ての後半に至って漸くにして語られる謎解きのための挿話として、作品の全体構造の中に組み込まれたのではないか。視点を変えていえば、水先案内人としてのピアンションが造形されたときはじめて、二つの主題を組み込んだ作品の全体構造が成立したのではないか。

ピアンションはこの作品の中で、『ゴリオ爺さん』以来はじめて、作者によって運命づけられていた再登場を果たすのであるが、いまやその役回りは大きく変わっている。先ず第一に、ここでのかれは物語の水先案内人にも似た役割を演じている。しかもそれを、作者と同じ地平の眼差しを有するがごとき作中人物として演じている。というのも、この物語の中で、いま現在そこに生きているのはピアンションただ一人だけであり、その点からすれば、デプランもブルジャもピアンションの過ぎ去った時代の中で描かれる人物、回想の中の人物にすぎないからである。そして第二に、物語が三人の作中人物から構成されているとすれば、かれは今や立派にその一角を占めているのであって、しかも導入から末尾に至るまで、たとえ外見的あるいは肉体的特徴の描写に欠ける面はあっても⁽⁴⁾、印象から来るその存在感に揺るぎはない。そして実際、小編ではあるが、この『無神論者のミサ』と『禁治産』の成立によって作中人物としてのピアンションの骨格は定まったかに見える。というのも、この作中人物が少なくとも準主要役級の役を演ずるのは、『人間喜劇』の構想以後の作品『田舎ミュージズ』を別にすれば、この二作品において際立っているからである。

2. 『禁治産』

『禁治産』のなかで語られる二つの事件、それは重層化された財産篡奪の物語である。ひとつには1685年、ナントの勅令廃止にもなって甘い汁を吸い莫大な資産を築き上げたデスパール侯爵家の物語であり、さらには

この作品の舞台となる1828年、その侯爵家の財産を独り占めにしようと企むデスパール侯爵夫人の物語である。新教徒から篡奪した富をめぐる、これを本来の所有者の子孫に戻そうとする夫と、そういう夫を正常心を失った禁治産者として法に訴えた妻の物語である。そしてこうした係争事件の解決を任された判事、それがジャン＝ジュール・ポピノー、この物語の主人公である。

では、『禁治産』の主旋律は何か。それはポピノーとデスパール夫人の対立である。法の原則、正義と公平の側に立つ担当判事ポピノーと、権力の近くにあつて社交界を牛耳るデスパール夫人の対立である。というのも、これは大略、ポピノーがデスパール夫人に闘いを挑み、やがてはその奸計と策謀の前に敗れ去る、そういう対立と闘いの物語だからだ。筋立ては事実、夫人側の非を証拠立てるところまでいきながらも最後のところでポピノーが事件の担当から外されてしまうという場面が終わっている。そして、法の正義と現実の権力との間に生じるこうした対立関係は、両者の倫理観の相違という地平に転写されてさらに際立った様相を見せる。ポピノーは貧しい階層を支援するために、デスパール夫人は社交界の贅沢と評判のために、それぞれの日々の多くを費やすからである。かくして、この作品『禁治産』の成立過程の中で二人ながら共に、初めて姿を現したポピノーとデスパール夫人は、法と権力の、あるいは貧困と奢侈の対立関係の両軸を代表する作中人物としてバルザックによって造形され、一方はひとときわ異彩を放つ謹厳な判事として、他方は奢侈と陰謀をこととしながら揺るぎない存在感を示す社交界の女として、やがては『人間喜劇』を彩る再登場人物となったのである。

判事ポピノーは、1837年の作品『セザール・ピロトー』で活躍するアンセルム・ポピノーの叔父にあたり、セザール家の法律助言者として著名な作中人物であるが、初出は1836年1月末から翌月半ばにかけて「クロニク・ド・パリ」紙上に五回にわたって連載された『禁治産』においてであり、この人物はまた、同年の春頃には成立していたとされる未完の作品『ボアルージュの相続人』の中で、ピアンション家と並ぶサンセール地方

の主要な新教系ブルジョワ、ポピノー一家の出であるとバルザックによって位置づけられている⁽⁵⁾。ピアンションの義理の叔父（叔母の夫）にあたり、したがって、生年は未詳だが物語が展開する王政復古期終わりの頃には四〇歳台半ばかそれ以上に達していると思われる。他方、デスパール夫人についてだが、おそらくは草稿執筆に先行して書かれたか、もしくはその最中に書かれたと考えられる断片が残っていて⁽⁶⁾、そこでバルザックは、若く美しく見られることに精力を傾けて社交界に名を馳せながら、実はその陰で別居してひっそりと暮らす夫と二人の子供の妻であり母親でもある「デスパール男爵夫人」（あるいは「デスパール伯爵夫人」）の輪郭を簡単に叙述している⁽⁷⁾。そしてこの断片には「はやりの女」（当今流行りの社交界の女）という章題が付されていたが、これはそのまま草稿の段階まで、冒頭部分の章題として採用されていたのである。

バルザックは1844年のフルヌ版を出すにあたって、結局は『禁治産』の章分けを廃止することになるが、それ以前までは付けられていた、この作品の冒頭部分の章題を時系列にそってたどると、草稿では「はやりの女」、プレオリジナルでは「不公正に裁かれた裁判官」、フルヌ版以前の刊本では「二人の友人」とされている⁽⁸⁾。そして、これらの章題のそれぞれに作中人物を対応させると、順番にデスパール夫人、ポピノー判事、ピアンションとラスティニャックとなる。これはどういう意味なのか。

物語がデスパール夫人とポピノー判事の対立関係を軸に展開されているとすれば、草稿とプレオリジナルの題目は、そのどちらもが適切に思われる。この短編が締め切りに追われた連載ものだったことを想起すれば、仮に草稿の段階では、まずは手慣れた社交界の女を造形し次いで新分野ともいえる裁判官を描き出そうと構想していたものが、やはり真の主役はポピノーなのだから、プレオリジナルでは「不公正に裁かれた裁判官」を採用したのだ、と考えることもできよう。主役がポピノーだというのは、これは後のことになるが、たとえばフルヌ版を見直す作業の中で『禁治産』を「パリ生活情景」から「私生活情景」へと移しかえている事実に着目して、この作品の本当の主役は「パリ生活情景」の看板を張るデスパール夫

人ではなく、「私生活情景」に相応しいポピノーなのだとはバルザックは考えていた、と思われるからである⁽⁹⁾。だがいずれにしろ第一章の主役を、奢侈な生活が原因の借金生活からの脱出を画策する社交界の「はやりの女」にするのか、もしくは、謹厳にして有能でありながら禁治産の申し立ての是非をめぐる、権力によって「不公正に裁かれた裁判官」にするのか、つまりは優先順位の問題である。さらには広い意味で、この二人の作中人物がどのような形で作品の全体構造の中に組み込まれるのかの問題である。そしておそらくはこの問題を解決するために、全体構想の最終段階のどこかで、第三の章題である「二人の友人」の構想、つまりピアンションとラスティニャックの友情関係が立ち現れ、かくして前者から叔父のポピノーへと、また後者からデスパール夫人へと物語が展開して行くという、そうした物語構造が成立したのではないか。

『禁治産』は実際、1828年のある日の午前1時頃、「二人の人物」がデスパール邸を辞したところから始まる。二人の人物として、先ずは「高名な医師オラース・ピアンション」が紹介され、次いで「ラスティニャック男爵」（草稿ではラスティニャック氏）への言及があって、この二人は以前からの友人であることが明らかにされる⁽¹⁰⁾。ほぼ1年前に出た『ゴリオ爺さん』以来の二人揃っての再登場であり、しばらくはこの二人の会話に紙面が費やされる。そして、ヴォケ館の物語以来それぞれに九年の歳月を経験し今や壮年となった二人のそうした会話の流れの中で、作品の中心テーマである禁治産訴訟に関わる主要人物、デスパール夫人と判事ポピノーについての、とりあえずの概略が語られて行く、という叙述様式が用いられている。デスパール侯爵夫人に接近して自らの「野望」の成就をもくろむラスティニャックは、その友人関係を利してピアンションにポピノーへの仲立ちを依頼する。担当判事ポピノーに圧力をかけようともくろむデスパール夫人の意向にそった行動である。一方ピアンションは、気の進まぬこの面倒な依頼を伝えるために叔父を訪れ、かくしてポピノー判事が登場し物語は本題へと展開して行くことになる。ピアンションの友人関係を契機として、読者はデスパール夫人の周辺へと、またその親類関係によ

てポピノー判事の生きる世界へと誘われるのである。とすれば、ピアンションとラスティニャックの友人関係があってはじめて、禁治産訴訟の真相、デスパール夫人とポピノー判事の対立関係を基調とする物語が作品の全体構造の中に組み込まれたのではないか。この年の九月、刊本としてヴェルデ社から出た『禁治産』の冒頭部分に、「二人の友人」という章題をバルザックが付加したことを想起すれば、そう思われるのである。そしてこの章題は、章分けが廃止されたフェルヌ版（1844年）の出る以前まで、つまり1839年のシャルパンティエ版までそのままに残されていたのである。

3. 『ゴリオ爺さん』

『ゴリオ爺さん』におけるピアンションの果たす役割は確かに、後にラスティニャックと並んで「二人の友人」と呼ばれたのに較べても、それほどものとは思われない。1834年12月から翌年2月にかけて雑誌に連載され、3月にはヴェルデ社から上梓されたこの作品の主人公、それは紛れもなく、当時の読者からすれば題名の示す通りゴリオその人であったろうし、あるいはまた、その後の数多くの作品に再登場するラスティニャックを知る読者にとってはこの作品を、パリの過酷な現実を学びつつ野心家としての自らの意識に目覚めて行く青年ラスティニャックの物語として読むこともできるからである。しかしながらここでのピアンションは、第一に行く末を思い悩むラスティニャックの良き相談相手、第二に悲劇的な死に至るゴリオに立ち会う医学生、そうした二重の意味での重要な役割を演じているのだ、と考えることもできる。

『ゴリオ爺さん』の残された草稿によれば、ある段階に至るまでバルザックの手になるピアンションの名前は無く、それは単にある「医学生」とされていたにすぎない。そして、この「医学生」に「ピアンション」という名前が与えられるのは、物語の筋立てが半ばも過ぎた頃であった⁽¹¹⁾。オラース・ピアンションの誕生である。ヌチンゲン夫人との関係に思い悩み、ヴォートランの世界観に頭を巡らせながら歩いていたそんなとき、ラ

スティニャックはリュクサンブール公園でこの「友人」に出会うのである。成熟した大人たち、ポーセアン夫人、ヴォートラン、そして年老いたゴリオから多くのことを学び、社交界、闇の世界、家族の絆、そうしたものの実態を助言され、また忠告されながら、文字どおり人生の先輩たちから教育を受けるがごとく日々を過ごしながらか法学部に在籍する学生ラスティニャック。そのかれが同年輩の具体的な「友人」としての「ピアンション」にそこで出会うのである。この名付け作業はおそらく、草稿の初期段階においてはそれほどの役割を担っていなかったこの人物が、作品の全体構想成立のある段階に至って、より重要な役割を果たすことになったがために行われたものと思われる⁽¹²⁾。かくしてバルザックの構想の中でいまや具体化して初めて姿を現したピアンションは、ラスティニャックを良く助けながら、物語のクライマックスであるゴリオの死を看取り、その死を悼む祈りを教会に依頼し葬儀屋を手配する役割まで演ずることになる。社交界に生きるゴリオの娘たちとの折衝に時を奪われ、心身をすり減らすラスティニャックの友人として十分過ぎるほどの役割を果たすのである。かくしてこの医学生が存在により、ラスティニャックの青年らしい無念の思いがより劇的に立ち現れるかに見える。とすればおそらく、終章のこうした構想を実現するためにピアンションは生まれ出たのではないか。小説の主人公たるべき自らの物語を内に抱えて現れたというよりも、むしろ作者の構想の中の、物語構造を成立させるための作中人物として誕生したのではないか。というのも、先に述べた二つの短編の中で、さらに発展した形式にのっとりながら、その同じピアンションがそこでもそうした役割を演じていると思われるからである。

一方、筋立ての上からみれば、終章の悲劇性を際立たせるための伏線であったと思われるリュクサンブール公園での二人の出会いは、また同時に相反する二つの特性の出会いでもあった。ピアンションは、パリでの立身の夢を実現するために頭を悩ますラスティニャックを前にして、それとは対極的とも思われる考えを表明するのである。つまり、自らの望みは身の丈に相応したささやかなもので、いずれは故郷にもどって父の医業を継ぐ

つもりなのだ、というのである⁽¹³⁾。勿論この言葉とは裏腹に、ビアンシオンはこの後、デプランやポピノーの職業的倫理と生活信条から多くを学びながら『人間喜劇』のバリエーションに活躍の舞台を求めて行くのだが、このことから必然的に、ポーセアン夫人、ヴォートラン、そしてゴリオを通して現実と直面したラスティニャックとは対照的な生き方を選ぶことになる。そして、ここに生まれた後々まで続く二人の友人関係、すなわちその気質と思想の差違・対立を特質とするこの友人関係は、すでに『禁治産』の中で相対立する生活信条として明確に描き出され、やがては『幻滅』第二部の中での、あるいは『カディニャン公妃の秘密』の中での対立関係へと展開して行くことになる。ビアンシオンは若き日、ダルテスを中心とする「セナクル」のメンバーとなり青年らしい理想主義を実践し、一方ラスティニャックは、権力に与する「社交界」に出入りし自らの野望を実現するのである。

☆

1836年初頭に発表された二つの短編の中でのビアンシオンの役割は、単なる水先案内人のそれに留まらず、その師弟関係、友人関係を通して、物語構造全体の成立に深く関わるという役割をも担っていたと思われる。そして、こうした二重の役割を演じながら、同時にまたここでのビアンシオンは、未だ十全なものとはいえないまでも、作中人物としての具体性、存在感を示しながら立ち現れている。そこにはたとえば、闊達な性格のままに多くの友情に恵まれながら生きる若き日のビアンシオン⁽¹⁴⁾、あるいは女性に関する生理学的、社会学的見解を雄弁に語る壮年のビアンシオン⁽¹⁵⁾が描写されているからである。では、そうしたビアンシオンとは何者なのか。デプランやポピノーとの筋立て上の、あるいは人格的影響関係の上での密接な関係にもかかわらず、物語の主人公とはいえない。では単なるナレーターなのか、もしくは書簡体小説の「私」のごときものなのか。ナレーターといえ、上記二編の一年後に出た『新女性研究』で語り

部を演ずるが、それに較べれば存在感はずっと重い。他方、書簡体小説といえ、前年に出た『ルイ・ランベール未刊書簡』(1835年8月)及び『谷間の百合』の前編二章分(同年11月)があるが、そこでの作中人物である「私」に較べて、今度はその奥行きと重量感という意味でもとより及ぶはずのものではない。ルイ・ランベールの精神生活を回顧し、あるいはフェリクス・ド・ヴァンドネスの感情生活を追想する「私」は、作者バルザックその人の体験に深く依拠する作中人物だからである。とすれば、ここでのピアンションは単なるナレーターではないが、かといって作者にとって「私」ほどには内在的ではない作中人物、つまりナレーターと「私」の中間領域にあって物語に関わる、そんな存在なのではないか。そしてもしそうだとすれば、こうした存在をバルザックは現実のどこで見出したのか。おそらくは自らの友人関係の中にそのモデルを求めたのではないか。

『ゴリオ爺さん』のリュクサンブール公園、そこでラスティニャックと出会うピアンションの現実のモデルはサンセール地方出身の医学生エミール・ルニョオであろう、とされている⁽¹⁶⁾。1831年以来、ジュール・サンドー、オギュスト・ボルジェ、ジョルジュ・サンド等とともにバルザックの共通の友人であったルニョオは、実際、この場面でのピアンションと同じ思い、多くを望まずやがては帰郷して親の跡を継ぎたいという思いを抱いていたらしい。というのも、そうした考えを断念し、仲間とともにパリで研鑽して行こうと、ジョルジュ・サンドがルニョオ宛(1831年5月9日付)に書き送っているからである⁽¹⁷⁾。とすればまた、上で述べたバルザックの交友関係が、本論で扱った三編の作品を通して、何らかの形で影を落としているのではないかと考えられる。『ゴリオ爺さん』の中では単なる端役にすぎないが、草稿の段階で「若い画家」あるいは「画家」とされていた人物に、後になってピアンションの名が与えられているところから、そこに医学生ルニョオと画学生オギュスト・ボルジェの反映を見ることができよう⁽¹⁸⁾。友情に囲まれながら生きる『無神論者のミサ』のピアンションの姿の中にルニョオのより色濃い影を見ることが出来るからである⁽¹⁹⁾。さらには1837年の同作品再版に際して献辞を捧げられたポ

(178)

ルジェの影を、名前の相似から水売り人ブルジャの中に探ること⁽²⁰⁾、あるいは『禁治産』でのデスパール侯爵の語る中国関係の蘊蓄の中にその方面に詳しくたボルジェの影響を読みとることもできるからである⁽²¹⁾。いずれにしるルニョオその人に実務面での手助けを受けながら「クロニック・ド・パリ」の運営に苦闘していた、当時のバルザックの交友関係が、あるべき友としてのピアンションとその周辺をめぐる、理想を込めた形で描写・投影されていると考えることができるのである。そして、この作中人物ピアンションが、物語構造を支える役目を一方では立派に担いながら、他方その実存性という点で、どことなく希薄な印象を読者に与えるのも、そのモデルの一人がごく親しい友人であったという、そうした事情のためなのではないか、と思われるのである。なるほど感情生活の面で、いかにその実存性を印象づける作中人物リュシアン・ド・リュバンプレも、その造形の多くの部分をルニョオとの同郷の友人ジュール・サンドーに負っているとされるが、これはバルザックとかれの友情関係が破綻してしまった後の話である。

作中人物ピアンションは『禁治産』以後、二、三の作品を経て⁽²²⁾、1839年の『幻滅』第二部及び『カディニャン公妃の秘密』に再登場することになるが、バルザックはこの間、1838年版の『あら皮』の場合を別にすれば、1835年以前の作品の作中人物の名前をピアンションに差し替えるという作業に必ずしも関心を抱いていたとは思われない。こうした修正が組織的に行われるのはやはり『人間喜劇』の構想を実現し始めて以来、正確には1842年以後のことである⁽²³⁾。1840年以後、この作中人物の活躍の場は『田舎ミューズ』（1843年）を頂点として大きく展開されることになるが、そこでのピアンションは医師、語り部、あるいは女性研究の泰斗といった役割を演じながら、時には創造者としてのバルザックと同じ眼差しをも読者の前に垣間みせるのである⁽²⁴⁾。

注

(1) Voici les éditions critiques et les articles, principalement utilisés et

consultés.

- ★ *La Messe de l'athée*, introduction, note et relevé de variantes par Guy Sagnes, Pléiade, t.III, 1976.
 - ★ *L'Interdiction*, introduction, note et relevé de variantes par Guy Sagnes, Pléiade, t.III, 1976.
 - ★ *Le Père Goriot*, introduction, note et relevé de variantes par P.-G. Castex, Carnier, 1963.
 - ★ *Le Père Goriot*, introduction, note et relevé de variantes par Rose Fortassier, Pléiade, t.III, 1976.
 - Moïse Le Yaouang, «Sur *L'Interdiction*», in *L'Année balzacienne*, 1971.
 - Michel Lichtlé, «Sur *L'Interdiction*», in *L'Année balzacienne*, 1988.
 - Anne-Marie Lefebvre, «Visages de Bianchon», in *L'Année balzacienne*, 1988.
- (2) <Un médecin à qui la science doit une belle théorie physiologique, et qui, jeune encore, s'est placé parmi les célébrités de l'École de Paris, centre de lumières auquel les médecins de l'Europe rendent tous hommages, le docteur Bianchon, a longtemps pratiqué la chirurgie avant de se livrer à la médecine.>, *La Messe de l'athée*, t.III, p.385, soulignés par l'auteur de cet article.
- (3) <[Le docteur Bianchon auquel nous devons *rayé*] Un médecin à qui la science doit *manuscrit*>, Ibid., p.1370.
- (4) <C'est seulement dans ce roman (*La Muse du département*) que l'on trouvera l'unique portrait physique, dans toute *La Comédie humaine*, d'un Bianchon déjà vieilli, en 1836.>, Anne-Marie Lefebvre, op.cit., p. 140.
- (5) *Les Héritiers Boirouge*, t. XII, p.390 ; Tetsuo Takayama, *Les Œuvres romanesques avortées de Balzac*, The Keio institute of cultural and linguistic studies, 1966, p. 107.
- (6) Ce texte se trouve au verso d'un billet adressé au Dr Nacquart. Voir la note de Guy Sagne (t.III, p. 1381) et celle de Roger Pierrot (Balzac, Correspondance, t. II, p. 790.).
- (7) <La [*comtesse rayé*] Baronne d'Espard>, t. III, p. 1381.
- (8) <Une femme à la mode>, <Un juge mal jugé>, <Les Deux Amis>, ibid, p. 1382. Voir Michel Lichtlé op.cit., pp. 151~153.
- (9) <Ce déplacement est dans la ligne d'une évolution de Balzac, dont il y a d'autres indices, tendant à faire de Popinot plutôt que de Mme d'

- Espard le protagoniste de cette <scène>.), note de Guy Sagnes, t. III, p. 1381.
- (10) Ibid. p. 421 et p. 1382. Voici ce qu'on lit dans le manuscrit et le préoriginal. Manuscrit : <Il était une heure du matin, deux personnes sortaient d'un hôtel situé dans la rue du Faubourg-Saint-Honoré, près de l'Elysée-Bourbon : l'une était un médecin célèbre, Horace Bianchon ; l'autre une des hommes les plus élégants de Paris, nommé M. de Rastignac, tous deux amis depuis longtemps.> Préoriginal : <En 1828, vers une heure du matin, deux personnes sortaient d'un hôtel situé dans la rue du Faubourg-Saint-Honoré, près de l'Elysée-Bourbon : l'une était un médecin célèbre, Horace Bianchon ; l'autre une des hommes les plus élégants de Paris, le baron de Rastignac, tous deux amis depuis longtemps.>
- (11) *Le Père Goriot*, Garnier, p. 154 et note de P.-G. Castex, p. 402.
- (12) Ibid., note de P.-G. Castex, pp.352~353.
- (13) Ibid., p. 156.
- (14) *La Messe de l'athée*, t.III, pp.388~389.
- (15) *L'Interdiction*, t.III, pp.421~426.
- (16) Jean Gaulmier, <George Sand, Balzac et Emile Renault>, in *Bulletin de la Faculté des Lettres de Strasbourg*, mai-juin 1954, p. 358 ; *Le Père Goriot*, pp.62~63, note de P.-G. Castex.
- (17) George Sand, *Correspondance*, t. III, p. 851.
- (18) *Le Père Goriot*, p. 63.
- (19) *La Messe de l'athée*, t.III, pp.388~389 ; Introduction par Guy Sagne, ibid., pp. 379~380.
- (20) Ibid., p. 380.
- (21) Ibid., pp. 487~488 et p. 1412.
- (22) *Autre étude de femme, Les Employés, La Maison Nucingen*.
- (23) Anne-Marie Lefebvre, op. cit., p. 126.
- (24) Ibid., pp. 135~139